

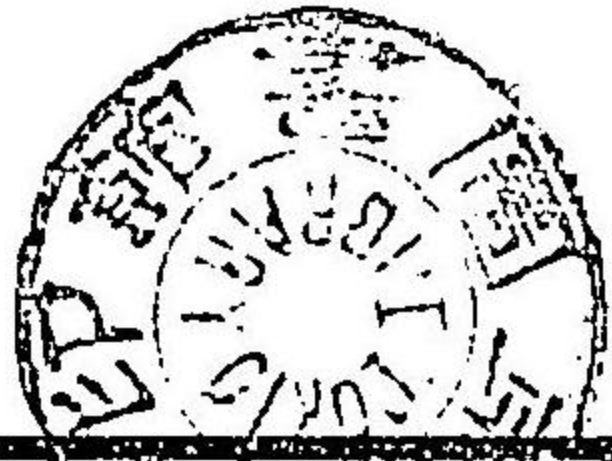
特42

837

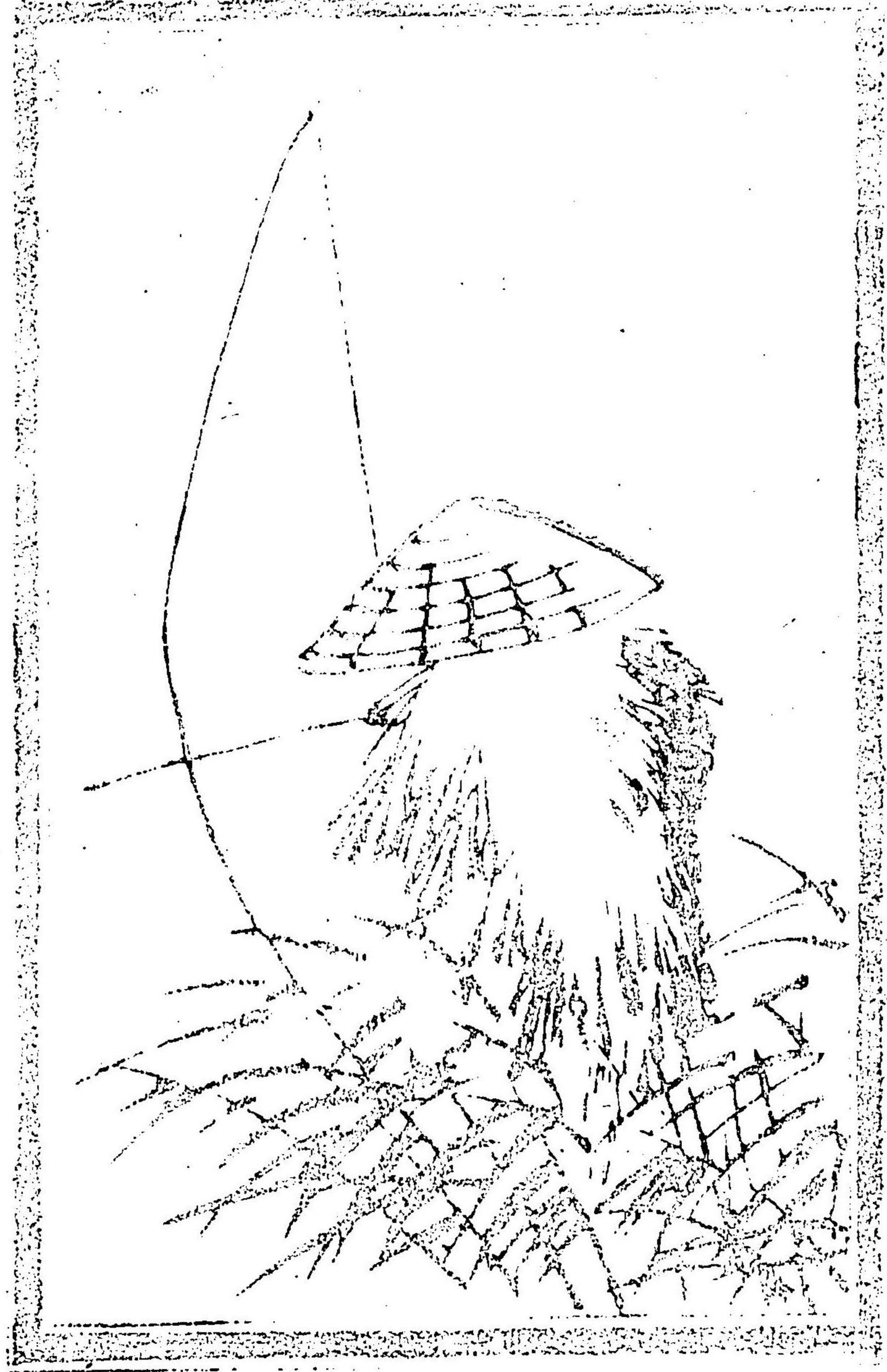
楠公三代記 全



No 23551 / 22



楠



南

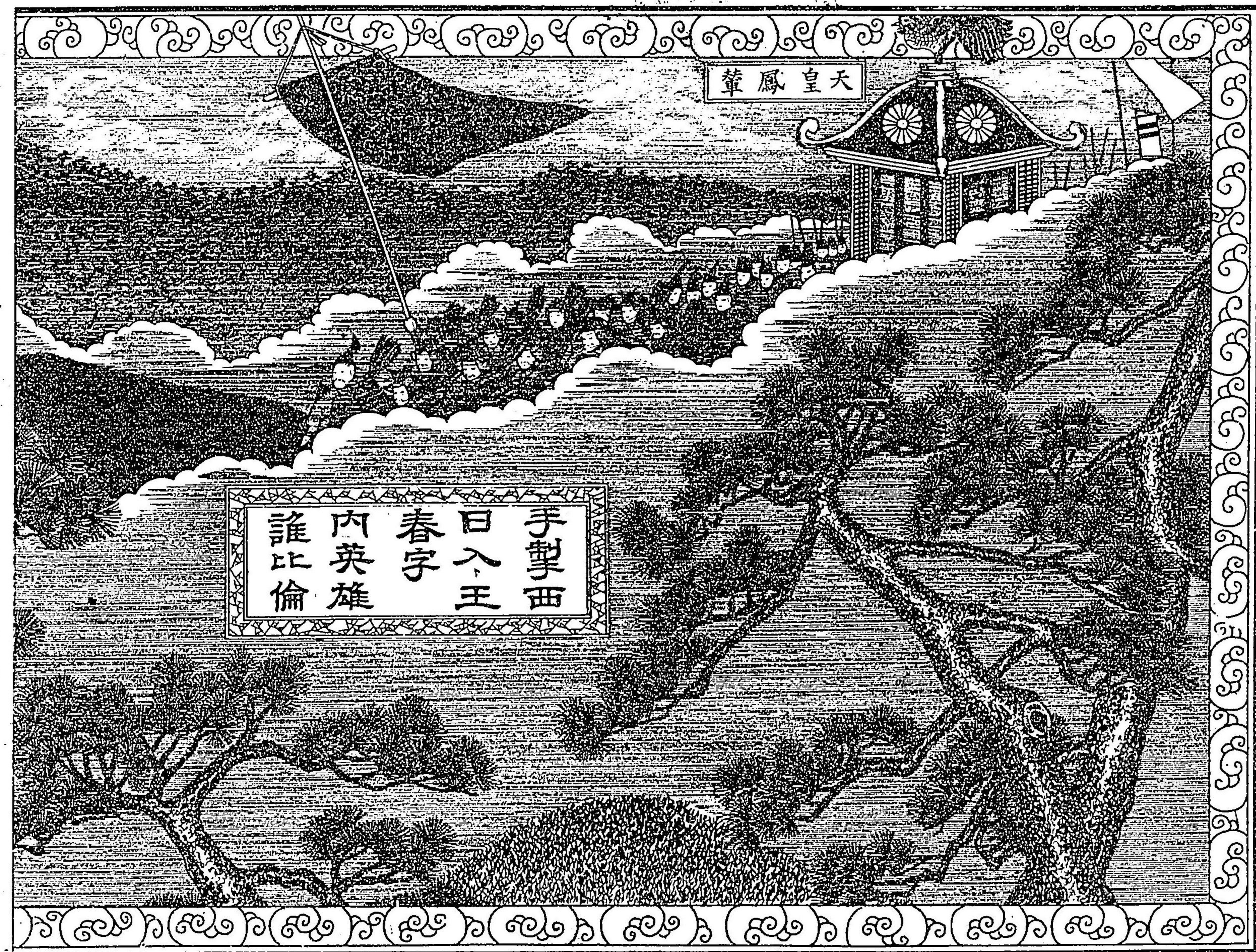
四



北

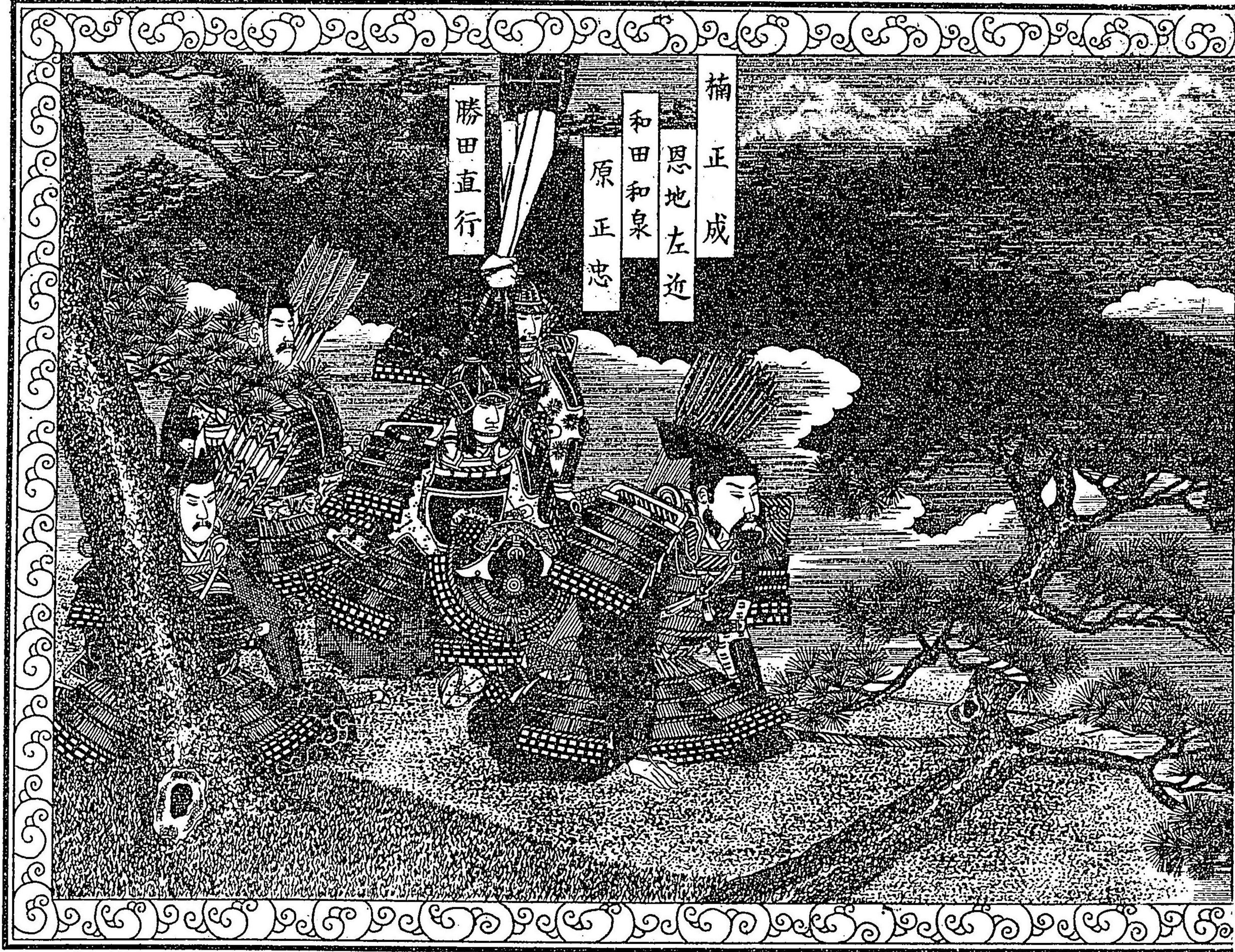


北條相模入道高時



手製西  
日入王  
春字  
内英雄  
誰比倫

天鳳皇





楠河内判官正成

古くは楠河内判官正成は、  
 世に名を馳せ、右近衛中将  
 正三位右近衛中將  
 臣楠正成が祖先をた  
 らしむる人皇三十一代  
 公遠く天皇の後胤  
 敏達天皇の御孫  
 その五代の玄孫  
 左大臣播磨守公和  
 年間にては、橘の世を  
 り夫より八代の末大納  
 古卿六代の後掃部助成  
 左工門尉正玄ケ一子則  
 正成なり元弘元年  
 後醍醐帝笠置山に  
 おたしまして河内  
 の武士正成を召す

同九月鎌倉の大軍笠置をせめやぶり赤坂城を  
 むその兵廿方余と号す城兵二百か五百余騎

内赤坂に住し、庭に楠の大樹あり、故  
 名を以て楠河内とす。時、諸国勤王の  
 事起り、正成はこれより正成赤坂山に城を築き、

五二

正成が奇計を以てこの大軍をやぶり又  
 志をく 関東 足利尊氏  
 の兵をなやま  
 す 関東勢次第に鎌倉に  
 退るを新田義貞また  
 勇を奮つて鎌倉に打  
 入り 猛威をしめして攻  
 おとせり 勢呼北条九代  
 の元 衆も高時奢多  
 上けり 無道を行ひし  
 ため 終ひ一時  
 二滅亡せり  
 さても楠正  
 成ハ八幡城  
 を恩地左近



守らせ置くとこ  
 ろは足利が勢を  
 攻むれども城兵かたき守りて  
 倦む如何せんとする所へ正成  
 し河州飯盛より兵を發する  
 退かんとし道を失して狼狽  
 ならず武田小笠原等  
 正成これより和  
 田岬へ兵船百八十  
 余艘まで漕ぎよせ  
 直義を攻め敗る直義  
 大におどろき支へ得ずし  
 て摩耶山に逃げこもるかして  
 尊氏ハ兵庫にありて直義の  
 待とるところは直義の  
 知らせしかむ其おどろき



の兵を考たかへ  
 大友肥後守と語り大  
 友が船のりせ万余  
 の兵を考たかへ

ついでに... 州... 船... 尊氏... 網魚... かく逃...

村上彦四郎義光



△すまき... 此所を先途と氣をふ... けるせ小船を助が... け乗りうつり彩う... じて和田岬へかけ... 上り福海寺まさせ... 込み住僧まをひて... 毘まそれ米俵は身... を志のむせ九死の... 中白藤を救むき... やりやく其身をの... かれけり尊氏勢... 八將軍の見えざ... るよ魂きえて... あるところ... へ危急をの

て退退きをまり見え... する時しも白藤彦七郎ひそ... かま小船にて尊氏ヶ船へと津... きよせ風上より火をえなち散々... 又戦へハ尊氏捨も網魚の如く逃...

かれて尊... 氏諸持の... 船まつき... けれハ初... めて×... ×安堵のおも... ひをなせり又... 楠ハ新田ととか... り是より直ち備中... 備前へ向えんと思ひ... しが義貞かへんせ



さりけれも正成大に無ねんよおもへど余義  
 なく都へのほりけり爰はまた村上彦四郎義光ハ  
 その子義隆等と共に  
 護良親王よあれたかハ  
 吉野よいららん  
 とする途まで  
 村上が徒兵  
 瀬が兵のた  
 めに錦旗を  
 奪ひとら  
 れたり義  
 光おくれ  
 てこふ  
 来り此の有  
 さまを見る  
 よりも怒り

大塔宮

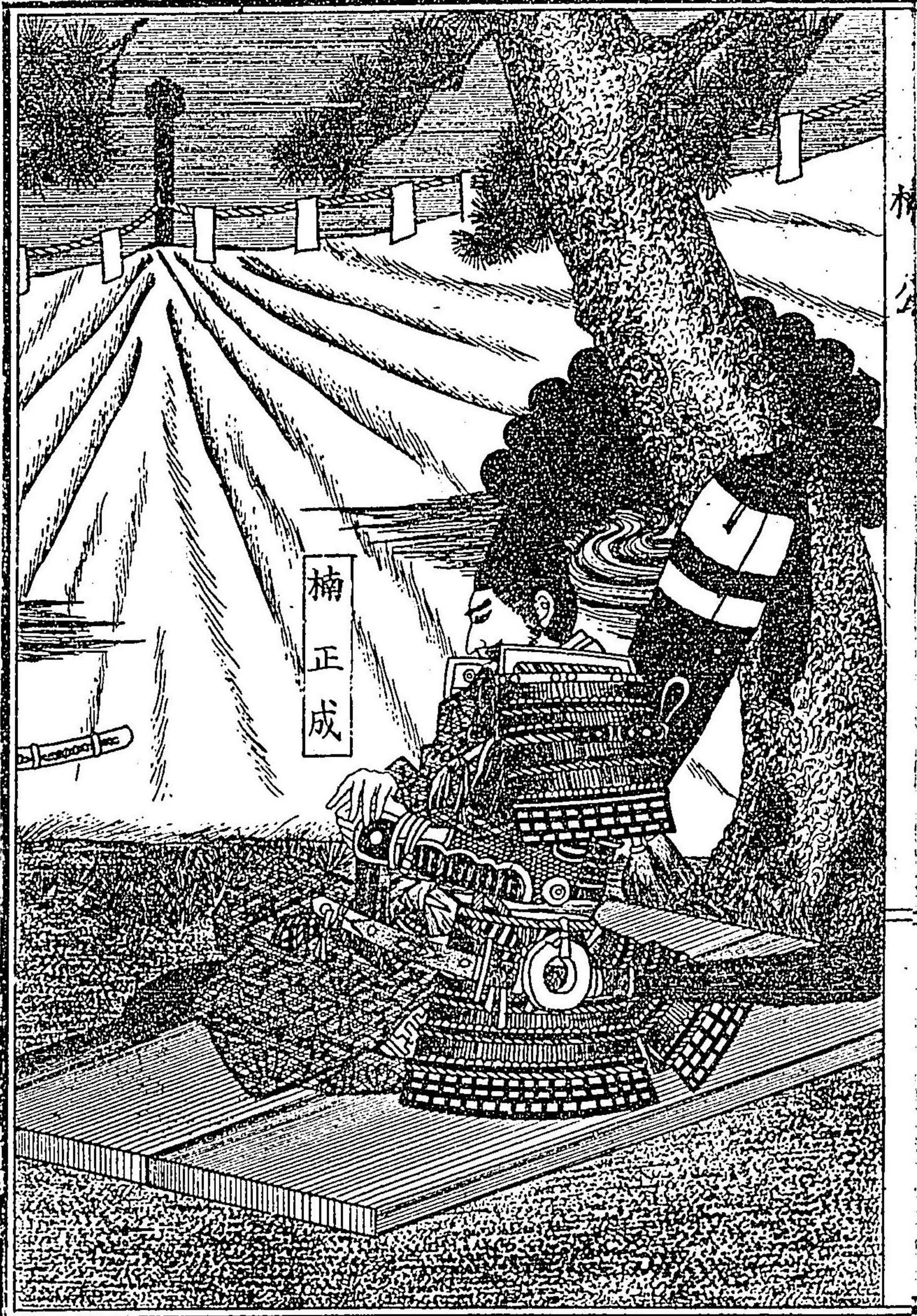


△そでハ婿毛のこ  
 こく親王よ代つ  
 て死すこれより  
 親皇ハ  
 千劍破  
 城へ御  
 坐を移  
 させ八  
 百六十  
 余人

猛りて斬り  
 倒し忽ち  
 錦旗を  
 とりかへし。

淵邊伊賀守  
 れるかみ折  
 から親王  
 遂に吉野よ  
 いたり用意  
 おびそくに堅柳  
 を構へ四方を守  
 りてある所へ敵兵  
 また襲ひきたり破竹のごとく押  
 すすれば親王自ら奮戦し玉ひまた湯  
 きて徒兵と寝をひらき慷慨の念酒たけ  
 たまして歌ひだまふ義光ハ勇戦してよろひの

れり建武二年  
 里小路



楠正成



楠正行

諫めたま  
 と帝用の  
 かりしか  
 臣道つく  
 何地とも  
 捜させ玉  
 右は婿び  
 倉探題と  
 邪なる  
 房上政  
 〇鎌倉  
 と聞さけ  
 れは直義  
 目を京都  
 援兵をひ  
 事急なれ  
 兵ひを受け  
 たしと揮  
 守護して

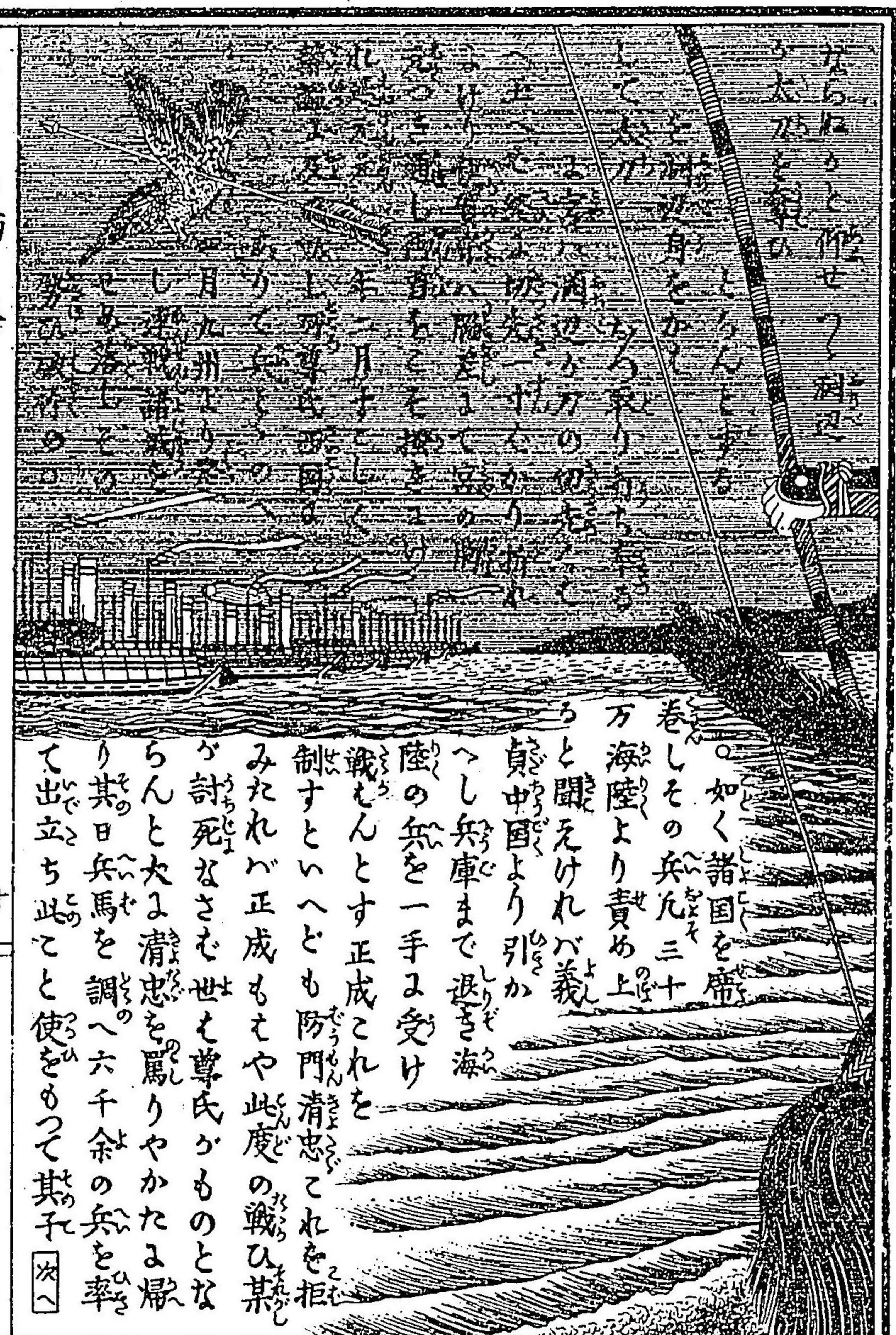
南

九



本間孫四郎重氏

山内をすぐるとき  
 潜か又淵辺伊賀守を招き  
 さくやまけるい我無勢として  
 再び兵を催し來りて敵を打  
 べしされど心は掛る大塔宮  
 なり彼君せよおとさば我  
 ゆるしかたし汝急ぎ歸り此  
 駭動又まぢれ宮を刺殺し  
 奉れと含めければ淵  
 近主従七騎まで引  
 近す官の暗夜の如き  
 土弓ま住み  
 の流しは淵  
 かりしは淵  
 るくは淵  
 切向は淵



如く諸國を席  
 卷しその兵九三十  
 万海陸より責め上  
 ると闘えければ義  
 貞中國より引か  
 へし兵庫まで退き海  
 陸の知を一手は受け  
 戦んとす正成これを  
 制すといへども防門清忠これを拒  
 みたれは正成もそや此度の戦ひ某  
 が討死なさを世も尊氏かものとな  
 らんと大は清忠を罵りやかたは厭  
 り其の日兵馬を誦へ六千余の兵を率  
 て出立ち此こと使をもつて其子



山陰道よりあちまへ上り  
 の事ゆゑさきから  
 美作杉坂は侍  
 ちうけ奉らん  
 杉坂さして  
 至りしは主  
 上院の庄に  
 入らせられし  
 ときもや其  
 すべなしとて  
 今まで主上の御  
 座ありし御所へ立  
 かへり櫻の古木を  
 押し削り天莫空  
 勾踐一時非無范蠡

楠左金吾正行



正行の死  
 正行の死  
 正行の死

と題して何所  
 身を距りける  
 正平四年正月  
 高師直大軍を  
 森山のふもと  
 正成が一子正  
 成を合せ  
 師直が戦を  
 臣南次郎左工  
 左工門等諸卒  
 の夥し然れども  
 き拒み戦ひけれ  
 じて正行必死し  
 て戦ふうち雨  
 矢の中なれど  
 りて討死なし



帝の震襟を  
 天下再び乱れ  
 忍びず師直師泰と  
 雄を決せんと欲す  
 一度龍顔を拝し  
 人と参内せりと奏  
 主上御袖を

南



楠正儀

法王世王ひ南殿まで正行又御説を請させ玉ふ  
夫より御暇を申し四天王寺の如意輪堂の壁板に各  
姓名をかきつらぬ一首の詠歌をなしへくらと  
かぬて思へど梓弓なるかすまいる名をぞとむる  
となんあるして出で行き終ふ四條繩手まで  
討死なせしなりとぞ嗚呼父子兄弟忠誠を  
全ふせし事感じても猶余りあること  
なこそ楠公は今猶櫻本國の湊川  
神社と祭られ忠臣  
義士の龜鑑とせの  
御場をる

版權  
所有

明治二十二年十一月三十日印刷  
年十二月二日出版  
東京市本町五丁目  
發行者 牧 金之助

